

[B年] 聖霊降臨節第3主日(2023年6月11日)**【旧約聖書日課】サムエル記下 7章4～16節**

4しかし、その夜、ナタンに臨んだ主の言葉は次のとおりであった。

5「わたしの僕ダビデのもとに行って告げよ。主はこう言われる。あなたがわたしのために住むべき家を建てようというのか。6わたしはイスラエルの子らをエジプトから導き上った日から今日に至るまで、家に住まず、天幕、すなわち幕屋を住みかとして歩んできた。7わたしはイスラエルの子らと常に共に歩んできたが、その間、わたしの民イスラエルを牧するようにと命じたイスラエルの部族の一つにでも、なぜわたしのためにレバノン杉の家を建てないのか、と言ったことがあるのか。

8わたしの僕ダビデに告げよ。万軍の主はこう言われる。わたしは牧場の羊の群れの後ろからあなたを取って、わたしの民イスラエルの指導者にした。9あなたがどこに行こうとも、わたしは共にいて、あなたの行く手から敵をことごとく断ち、地上の大いなる者に並ぶ名声を与えよう。10わたしの民イスラエルには一つの所を定め、彼らをそこに植え付ける。民はそこに住み着いて、もはや、おののくことはなく、昔のように不正を行う者に圧迫されることもない。11わたしの民イスラエルの上に士師を立てたところからの敵をわたしがすべて退けて、あなたに安らぎを与える。主はあなたに告げる。主があなたのために家を興す。12あなたが生涯を終え、先祖と共に眠るとき、あなたの身から出る子孫に跡を継がせ、その王国を揺るぎないものとする。13この者がわたしの名のために家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえに堅く据える。14わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。彼が過ちを犯すときは、人間の杖、人の子らの鞭をもって彼を懲らしめよう。15わたしは慈しみを彼から取り去りはしない。あなたの前から退けたサウルから慈しみを取り去ったが、そのようなことはしない。16あなたの家、あなたの王国は、あなたの行く手にとこしえに続き、あなたの王座はとこしえに堅く据えられる。」

【使徒書日課】使徒言行録 2章37～47節

37人々はこれを聞いて大いに心を打たれ、ペトロとほかの使徒たちに、「兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか」と言った。38すると、ペトロは彼らに言った。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物と

して聖霊を受けます。39この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、遠くにいるすべての人にも、つまり、わたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです。」40ペトロは、このほかにもいろいろ話をして、力強く証しをし、「邪悪なこの時代から救われなさい」と勧めていた。41ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に三千人ほどが仲間に加わった。42彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。

43すべての人に恐れが生じた。使徒たちによって多くの不思議な業としるしが行われていたのである。44信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、45財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。46そして、毎日ひたすら心一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、47神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである。

【福音書日課】ルカによる福音書 14章15～24節

15食事を共にしていた客の一人は、これを聞いてイエスに、「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう」と言った。16そこで、イエスは言われた。「ある人が盛大な宴会を催そうとして、大勢の人を招き、17宴会の時刻になったので、僕を送り、招いておいた人々に、『もう用意ができましたから、おいでください』と言わせた。18すると皆、次々に断った。最初の人には、『畑を買ったので、見に行かねばなりません。どうか、失礼させていただきます』と言った。19ほかの人には、『牛を二頭ずつ五組買ったので、それを調べに行くところです。どうか、失礼させていただきます』と言った。20また別の人は、『妻を迎えただけなので、行くことができません』と言った。21僕は帰って、このことを主人に報告した。すると、家の主人は怒って、僕に言った。『急いで町の広場や路地へ出て行き、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れて来なさい。』22やがて、僕が、『御主人様、仰せのとおりにいたしました。まだ席があります』と言うと、23主人は言った。『通りや小道に出て行き、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいしてくれ。24言っておくが、あの招かれた人たちの中で、わたしの食事を味わう者は一人もいない。』」

『聖書協会共同訳』（2018年版）読み比べ

サムエル記下 7章4～16節

⁴しかし、その夜、主の言葉がナタンに臨んだ。⁵「私の僕ダビデのもとに行って告げなさい。『主はこう言われる。あなたは私のために、私が住む家を建てようというのか。⁶私はイスラエルの人々をエジプトから導き上った日から今日に至るまで、家に住んだことはなく、天幕と幕屋を住みかとして歩いて来た。⁷私がイスラエルの人々すべてと共に渡り歩いて来たその間、私の民イスラエルを牧するように命じたイスラエルの部族の一つに、なぜあなたがたは私のためにレバノン杉の家を建てないのか、と一度でも言ったことがあるだろうか。』

⁸今、私の僕ダビデに告げなさい。『万軍の主はこう言われる。牧場で羊の群れの後ろにいたあなたを取って、私の民イスラエルの指導者にしたのは私だ。⁹あなたがどこに行こうと、私は共にいて、あなたの前から敵をことごとく絶ち、地上の大なる者の名に等しい名をあなたのものとする。¹⁰私の民イスラエルには一つの所を定め、そこに彼らを植える。彼ら敵に代わって根を下ろし、もはや恐れおののくことはない。初めの頃のように、不正を働く者が民を苦しめることはもうない。』

¹¹昔、私の民イスラエルの上に士師を立てた頃のように、私はあなたの敵をことごとく退け、あなたに休息を与える。主は告げられる。主があなたのために家を興す。¹²あなたが生涯を終え、先祖と共に眠るとき、あなたの末裔、あなたの身から出る者を後に立たせ、その王国を揺るぎないものとする。¹³その者が私の名のために家を建て、私は彼の王国の王座をとこしえに堅く据える。¹⁴私は彼の父となり、彼はわたしの子となる。彼が過ちを犯すときは、私は人の杖、人の子らの鞭をもって彼を懲らしめよう。¹⁵私はあなたの前からサウルを退けたが、サウルから取り去ったように、その者から慈しみを取り去ることはしない。¹⁶あなたの家とあなたの王国は、あなたの前にとこしえに続く。あなたの王座はとこしえに堅く据えられる。』

使徒言行録 2章37～47節

³⁷人々はこれを聞いて大いに心を打たれ、ペトロと他の使徒たちに、「兄弟たち、私たちは何をすべきでしょうか」と言った。³⁸すると、ペトロは彼らに言った。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、聖霊の賜物を

受けるでしょう。³⁹この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子どもたちにも、また、遠くにいるすべての人にも、つまり、私たちの神である主が招いてくださる者なら誰にでも、与えられているものなのです。』⁴⁰ペトロは、このほかにも多くの言葉で証しをし、「邪悪なこの時代から救われなさい」と言って彼らを励ました。⁴¹ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に三千人ほどが仲間に加わった。⁴²そして、一同はひたすら、使徒たちの教えを守り、交わりをなし、パンを裂き、祈りをしていた。

⁴³すべての人に恐れが生じた。使徒たちによって多くの不思議な業としるしが行われていたのである。⁴⁴信じた者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、⁴⁵財産や持ち物を売っては、必要に応じて、皆がそれを分け合った。⁴⁶そして、毎日ひたすら心一つにして神殿に集まり、家ではパンを裂き、喜びと真心をもって食事を共にし、⁴⁷神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加えてくださったのである。

ルカによる福音書 14章15～24節

¹⁵同席していた客の一人が、これを聞いてイエスに、「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう」と言った。¹⁶そこで、イエスは言われた。「ある人が盛大な宴会を催そうとして、大勢の人を招き、¹⁷宴会の時刻になったので、僕を送り、招いておいた人々に、『もう準備ができましたので、お出でください』と言わせた。¹⁸ところが、皆、一様に断り始めた。最初の方は、『畑を買ったので、見に行かねばなりません。どうか、失礼させていただきます』と言った。¹⁹ほかの方は、『牛を五対買ったので、それを調べに行くところですよ。どうか、失礼させていただきます』と言った。²⁰また別の人は、『妻を迎えなければなりません。行くことができません』と言った。²¹僕は帰って、このことを主人に報告した。すると、家の主人は怒って、僕に言った。『急いで、町の大通りや路地へ出て行き、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れて来なさい。』²²やがて、僕が、『ご主人様、仰せのとおりにいたしました。』²³主人は言った。『街道や農地へ行って、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいにしてくれ。』²⁴言うておくが、あの招かれた人々の中で、私の食事を味わう者は一人もいない。』

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・6月11日「聖霊降臨節第3主日」の日課主題は「教会の一致と交わり」。

・旧約聖書日課は、「サムエル記下」から、ダビデ王の側近預言者ナタンに神から預言が告げられたことを物語る箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、聖霊降臨の日にペトロが告げた演説に応じて仲間に加わった人々の教会生活を報告する箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、主イエスが語られた「神の国の食事」に関する教えを伝える箇所。

旧約日課(サムエル下7章より)

・「サムエル記」は、ユダヤ教正典「前の預言者」の第三に置かれた歴史物語文書。便宜上、上下巻に分けて扱われているが、元来は一卷もの。「ユダ・イスラエル建国物語」であり、「イスラエルとユダ」の枠組みで初めて「王」となった「サウル」と、サウル王没後に、まず「ユダ」の王となり、続いて「イスラエル」の王としても立てられた「ダビデ」の時代を扱う。本書は、紀元前6世紀のバビロン捕囚期以後に、かつてのユダ王国の末裔として再建された「ユダヤ教共同体」によって編纂された正典の一部を為しており、「ユダ王国＝ダビデ王家」の立場で伝承されてきた歴史認識に基づいている。二人の「王」は、いずれも「シロ神殿」で祭司に育てられた預言者サムエルによって「油を注がれる」ことによって神的権威を付与されたことになっている。ただし、ダビデが王に即位したのはサムエルの死後のこととして描かれている。おそらく、地理的關係から、歴史的にシロ神殿に帰属していたサムエルと直接的な関係を有していたのはベニヤミン族出身のサウル王＝サウル王家であったが、ユダ族出身のダビデが自部族(ユダ)の王にとどまらずにサウルが支配していた北部諸部族(イスラエル)に対しても王として支配権を確立するにあたって、「秘められていたダビデ伝承」としてサムエルとの関係性(油注ぎ)を物語ることによって、その王権の正統性を示そうとしたのだろう。サムエルが帰属していたシロ神殿に安置されていた「神の箱」をダビデが保持し、新首都エルサレムに運び込み、その神殿を建立しようとしたという筋書きも、その正統性を主張しようとしたことと考えられる。

・預言者ナタンは、出自の描かれぬ人物で、ダビデが「ユダとイスラエルの王」となってエルサレムに都を移した後に初めて登場する。ダビデには「ナタン」という名の息子があったことが伝えられているが(サム下5:14など)、通説では別人物と考えられている。しかし、預言者ナタンは、ダビデ王晩年の王位継承争いで次王ソロモンを擁立した主要人物としても描かれており(王上1章)、王族の一人であった可能性は十分に考えられる。正典「後の預言者」において、預言者ナタンの位置づけは、ダビデ王朝における宮廷預言者(王の側近助言者)の原型と考えられている。

・日課箇所は、ナタンがダビデの神殿建設計画に対して、当初はそれを全面的に肯定する意見を述べながら、それを覆して建設を認めないという神の御心を預言として告げた経緯を描いている。この逸話は、王の願望を神が拒まれることを預言者が告げる逸話によって、王に対する神の絶対性のみならず、預言者の優位性を求める「預言者神学」を主張していると考えられる。同時に、この逸話が告げる預言には、ダビデの打ち立てた王権が子々孫々受け継がれるという神の御心が強調され、ダビデ王家の「王朝神学」を主張するものともなっている。とくに後者の主張は、旧約正典全体のみならず、新約諸文書などにまで強く影響を及ぼしており、この逸話で告げられる預言は、「ナタン預言」と呼ばれてきた。おそらく、元来王国で伝承されてきた「ダビデ王物語」においても、この逸話の中心主題は、後者の「王朝神学」の主張にあったと考えられる。神殿建設は、ダビデを継いだ次王ソロモンによって実現したことであり、ダビデ王の神殿建設の願望が神(実際は預言者ナタン)によって退けられたというくだりは、ダビデの王としての謙遜な態度を描くために導入されたと考えられる。

使徒書日課(使徒言行録2章より)

・「使徒言行録」の全般的特徴については、前回および前々回の資料を参照。

・日課箇所は、五旬祭の折の「聖霊降臨」の出来事の中に位置づけられる前半部と、それを受けて初期の使徒たちの共同体の生活ぶりをまとめた後半部とからなる。

・前半部は、ペトロの説教演説を聞いた人々が、その教えを受け入れて洗礼を受け、「その日に三千人ほどが仲間に加わった」と描かれている。この人数は現実的にはほとんどあり得ないように思われるが、同様の誇張表現と思われる描写は繰り返されており(4:4「男の数が五千人ほどになった」)、四福音書にもいわゆる「五千人の食事」の逸話などがある。一方で、「使徒言行録」自体は、5章以降で信者の人数規模を具体的な数字で描写することをしておらず、物語が進行するにしたがって、教会共同体の拡大は、その人的規模よりも地理的広がりに関心が移されている。本書が公開された時点での教会共同体にとって、「三千人」とか「五千人」という規模がまったくの出鱈目であったとは考えられないので、これらの数字は、本書編纂時点で考えられていた全教会共同体の規模を反映しているのかもしれない。社会学者 R.スタークは、聖霊降臨時の弟子たちの数120人と紀元300年ごろのローマ帝国下における推定されるキリスト者数(600万人±100万人)を基にして、宣教開始後50年で信者数1400人、100年後でも信者数は1万人に満たなかったという推論を提示している(『キリスト教とローマ帝国』亀田信子訳、新教出版社、2014年)。この推測値は、モルモン教拡大の観測値とほぼ一致しているとされている(同書)。

ここに描写される初期教会の生活ぶりは、理想化されたものとしても、本書公開時(おそらく紀元 100 年より前)における教会共同体が考えていた自分たちの共同体のあるべき姿が反映されたものではあったと考えられる。すなわち、42 節「使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ること」は、教会共同体の基礎を為す営みと考えられ、財産共有などによる相互扶助的実践が重んじられ(44~45 節)、日常生活と宗教実践が一体化した信仰生活が奨励されていた(46~47 節)のであろう。なお、42 節「使徒の教え(ディダケー)」に関連して、同時代に著されたと推測される使徒教父文書「十二使徒の教訓(ディダケー)」が知られている。「相互の交わり(コイノニア)」は、「パウロ書簡集」が強調する信仰共同体的のあり方を表す表現。「パンを裂くこと」は、「主の晩餐」の中にある中心的な所作で、「聖餐」典礼の原型を指している。

福音書日課(ルカ 14 章より)

・日課箇所は、主イエスが安息日の会堂礼拝後に招かれたファリサイ派の議員の家で食事をされた際に語られた一連の教えの一部で、「神の国の食事の教え」あるいは「大宴会のたとえ」として知られる。

・このたとえは、「マタイ福音書」が伝える「婚宴のたとえ」(マタイ 22:1~10)と基本構造が同じで、もともと同じたとえの派生形と推認されるが、両福音書の文脈的な位置づけは大きく異なる。「マタイ」は、「婚宴のたとえ」を「受難物語」の中に置き、マタイの強調する「終末の裁き」を象徴的に教えるたとえとして扱っていると考えられる。それによって「マタイ」は、「神の招きに応えること」の重要性を教えようとしている。他方、「ルカ」は、このたとえを、日常的な食事(宴席)の実践という文脈の中で扱い、象徴的というよりは直截に「食事」を主題とする教えとして扱っている。それによって「ルカ」は、「神のもとに人々を招くこと」の重要性を教えようとしている。なお、概して「マタイ」は、観念化・概念化された教えを通して信者の内発的な行動変容を促す傾向にあるが、他方で「ルカ」は、より具体的な事例を通して模倣による行動変容を促す傾向にある。

・ここで繰り返し用いられる「宴会(ディブノン)」(16 節、17 節、24 節。前段の 12 節にも)という語は、「ヨハネ福音書」が「香油注ぎ」の場面(ヨハネ 12:2)や、主イエスと弟子たちの最後の「夕食」の場面(同 13:2,4)を表すのに用いている語で、「パウロ書簡」が「主の晩餐」に関する教えを語る(Ⅰコリ 11:20,21)のに用いている語。類似のたとえを伝える「マタイ」は、「婚宴(ガモス)」(マタイ 22 章、25:10)という語を用いており、「ルカ」もこの語を知らないわけではない(ルカ 12:36、14:8)。「ルカ」は、この「宴会(ディブノン)」という語が初期教会で「主の晩餐」を指す用語として受け入れられ始めていることを承知の上で、この用語をこのたとえに用いているのであろう。すなわち、このたとえは、きわめて教会論的な教えの色彩が強いものである。

来週の誕生日 (6 月 11 日~17 日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-19 番「み栄え告げる歌は」は、20 世紀後半に起こった英語讃美歌創作運動の中心人物の一人、フレッド・P・グリーン(1901-1978)の作詞。グリーンは英国メソジスト教会の牧師。曲は、19 世紀後半~20 世紀にかけて英国で教会音楽家として活躍した C・V・スタンフォードの作曲。この曲は、元来、「この世にあかし立てて」(379 番)のために作曲されたが、転用された。
- ・21-553 番「キリストがわけられた」(☐22 番)は、Land of Rest の曲名で知られる米国の民謡曲に、聖餐/愛餐に用いるための詞を讃美歌委員会が付した。米国では、この曲に「O Land of Rest」他さまざまな歌詞が付けられた讃美歌がみられる。
- ・21-542 番「主が受け入れてくださるから」は、20 世紀半ばに始まった新しい讃美歌創作運動(ヒム・エクスプロージョン)の中心人物の一人フレッド・カーンの作詞。作曲はパナマ出身でジャマイカで教育を受けた作曲家ドレーン・ポッター。

21-19「み栄え告げる歌は」

When in Our Music God is Glorified

1. When in our music God is glorified, / and adoration leaves no room for pride, / it is as though the whole creation cried: / Alleluia!
2. How often, making music, we have found / a new dimension in the world of sound, / as worship moved us to a more profound / Alleluia!
3. So has the church, in liturgy and song, / in faith and love, through centuries of wrong, / borne witness to the truth in every tongue: / Alleluia!
4. And did not Jesus sing a psalm that night / when utmost evil strove against the light? / Then let us sing, for whom he won the fight: / Alleluia!
5. Let every instrument be tuned for praise! / Let all rejoice who have a voice to raise! / And may God give us faith to sing always: / Alleluia!

21-542「主が受け入れてくださるから」

Help Us Accept Each Other

1. Help us accept each other as Christ accepted us; teach us as sister, brother each person to embrace. Be present, Lord, among us and bring us to believe We are ourselves accepted, and meant to love and live.
2. Teach us, O Lord, your lessons, as in our daily life we struggle to be human and search for hope and faith. Teach us to care for people, for all, not just for some, to love them as we find them, or as they may become.
3. Let your acceptance change us, so that we may be moved in living situations to do the truth in love, to practice your acceptance until we know by heart the table of forgiveness, and laughter's healing art.
4. Lord, for today's encounters with all who are in need, who hunger for acceptance, for righteousness and bread, we need new eyes for seeing, new hands for holding on; renew us with your Spirit, Lord, free us, make us one!